

「まことにあなたは御自分を隠される神、イスラエルの神よ、あなたは救いを与えられる(イザヤ 45:15)」。何ゆえ神は御自分を隠されるのか。それも原語は強意形で、「隠し通す」と訳せるほどに。

すべてを創り、すべてを統べ給う全能の方だから、皆が驚愕する奇跡を見せてくれたなら、世は神にひれ伏し、人々がもっと救われるんじゃないか。

今日、多くの者が「神なんて存在しない、人間の幻想の産物だ」と言う。時々でも、徴を見せてガツンとやってくれれば伝道しやすいのに、とふと思う。

いや、こんな願望は何かおかしいぞ。神をそのように「利用」するのか、人間が分かる「実感」に神を引き下げるのか、手応えや証拠で「担保」しうる救いにしたいのか。

こんな思いには、神に「従う」どころか、神を「従わせ」ようとする底意がある。そこへ陥らぬためにも、神は御自分を「隠し通される」のか。それでは、イエスがなされた死者の復活や、癒しの奇跡は「まやかし」なのか。

イエスは死者を甦らせ(ヨハネ 11:43~44)、不治の病を癒し(5:8~9)、水を葡萄酒に変えた(2:7~9)。とはいえ、ラザロは甦ったが寿命か殺されるかして(12:10)やがて死ぬ。癒された男も病気知らずの鉄人になったわけではない。

「風(霊)は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊(風)から生まれた者も皆そのとおりである(3:8)」。私たちは奇跡を霊の音のごとく「聞く」だけで、霊として吹く神は御自分を「隠し通して」いてその行方は掴めない。

「わたしは人間の綱、愛のきずなで彼らを導き、彼らの顎から轡を取り去り、身をかがめて食べさせた(ホセア 11:4)」。神はこうした「愛」の方であるのに、愛を披瀝なさらず、御自分を隠し通して私たちを救う(イザヤ 45:15)。

私たちは神に「愛されている」ことを実感したいが、神は「自分は愛だよ」という現れ方をなさらない。神の愛は、怒りのような、試練のような、裁きのような現実の奥に隠されている。

聖書の鉅脈を掘り当てるルターは、預言書のこの箇所を畳み込むように表現する。「我々の命は死の下に、我々の喜びは憎しみの下に、栄光は屈辱の下に、救いは滅びの下に、天国は地獄の下に、知恵は愚かさの下に、義は罪の下に、力は弱さの下に隠されている」。

私たちの真も、神の愛と共に、このように隠されている。私たちのまん中に、この隠された真を据えておきたい。

「神は、わたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められた(1テサロニケ 5:9)」。神は時々、「怒りに定める」方のように見えるけれども、キリストによる救いに与らせようとしておられる。

「主は、わたしたちのために死なれたが、それは、わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになるため(5:10)」。

霊の風が吹いて目覚め、「神は愛」だと分かる瞬間がある。眠ったままで「神は怒り」だと思っている時がある。死に隠されている真の命よりも、面前の死に囚われて「眠って」しまうことがある。

だが「眠っていても(5:10)」、私たちは「主と共に生きるように(5:10)」にされている。主は私たちのために十字架にかかった(5:10)。

十字架の死にこそ、すべての民に与えられる永遠の命が隠されている。



#### 《おまけのひとこと》

もらい物のマンゴーを食べた 甘い果肉を食べ種は捨てた 珈琲豆の果肉も甘いが それは捨てる種を焙煎して苦さを飲む珈琲 神は種に隠されている だが不用意に人間の果肉を捨ててはならぬ